

2007 年度

## 摂津祭 展示企画

(甲南 21 クリエイティブ・プラン・デイ・イベント)

キャンパスから始める環境啓発運動

- “いのち”の教育・クラブとのパートナーシップ・  
地域連携を通して -



2007.11.22-24

甲南大学3号館 352 講義室



経験して分かること

文学部 人間科学科 淡路 麻里子

今回初めて、学祭に主催側の一員として参加しました。展示副責任者ということもあり、毎週行われる会議の参加や書類提出など当日までの準備やプロセスの大変さを知ることができました。

学祭が始まり教室にお客さんを迎え感じたことは、教えること・伝えることの難しさでした。一番難しかったことは、竹とんぼを削るために使うカッターの使い方です。特に小さな子供は、教えられたことを素直に聞いて、そのまま行動に移すので、言葉の選び方に注意が必要でした。体で覚えていることを、言葉で慎重に説明することは難しく、それを実感すると共に、自身もあらためて再確認することができ、よ

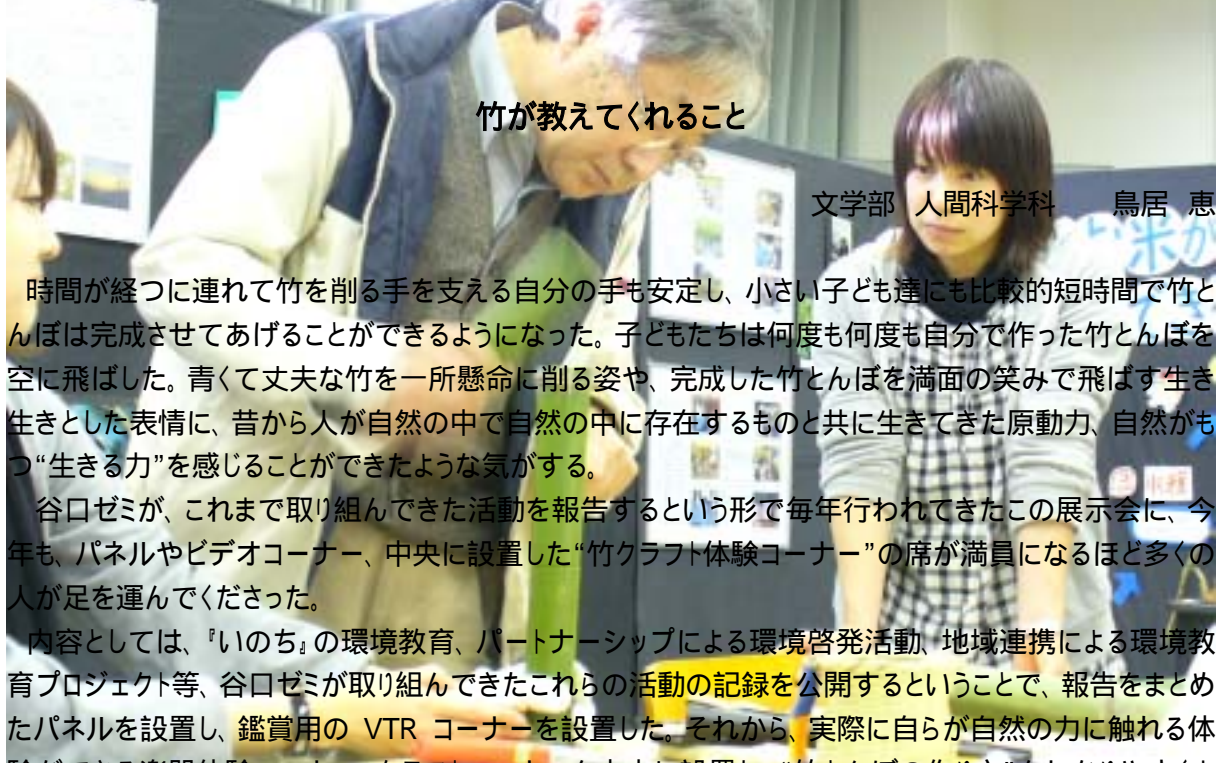


り理解が深まりました。

そして、一度コツを掴んで流れがのってくると、子供から大人まで年齢に関係なく、真剣に竹を削り続けていました。また、いざ竹とんぼを飛ばして、上手くいかなかったときの修正や微調整は、さらに真剣で私が教える際もなく、まず自分でどうにかしようという姿がありとても印象的でした。手間がかかった分、上手く飛んだときはみんな本当に嬉しそうで、ずっと横にいて見ていた私も自然に笑顔になりました。

また、1つの竹トンボでは満足できず、2本目を作ろうとする子や少し工夫してはねの形を変えてみたり、軸にはねを2本つけてみたりと、それぞれが自分なりに楽しみを発見して作業しているように感じました。

しかし、ほとんどすでに竹を切ったはねの状態から作業を始めてもらったため、竹の特性は伝えきれなかったように感じます。また、どうしても竹とんぼの体験コーナーというイメージが強くてしまったように思います。来年はさらに竹トンボ以外の竹クラフトの幅を広げ、今回の反省点を改善できたらとよいと思いました。



### 竹が教えてくれること

文学部 人間科学科 鳥居 恵

時間が経つに連れて竹を削る手を支える自分の手も安定し、小さい子ども達にも比較的短時間で竹とんぼは完成させてあげることができるようになった。子どもたちは何度も何度も自分で作った竹とんぼを空に飛ばした。青くて丈夫な竹を一所懸命に削る姿や、完成した竹とんぼを満面の笑みで飛ばす生き生きとした表情に、昔から人が自然の中で自然の中に存在するものと共に生きてきた原動力、自然がもつ“生きる力”を感じることができたような気がする。

谷口ゼミが、これまで取り組んできた活動を報告するという形で毎年行われてきたこの展示会に、今年も、パネルやビデオコーナー、中央に設置した“竹クラフト体験コーナー”の席が満員になるほど多くの人が足を運んでくださった。

内容としては、『いのち』の環境教育、パートナーシップによる環境啓発活動、地域連携による環境教育プロジェクト等、谷口ゼミが取り組んできたこれらの活動の記録を公開するというので、報告をまとめたパネルを設置し、鑑賞用の VTR コーナーを設置した。それから、実際に自らが自然の力に触れる体験ができる楽器体験コーナー、クラフトコーナーを中央に設置し、“竹とんぼの作り方”をわかりやすくまとめた冊子を配布した。それから、工夫次第でゴミやエネルギー使用量の削減が可能となる“エコクッキングレシピ集”を製作・配布し、訪れてくださった人に、身近なところからのエコ生活を呼びかけた。

“竹を割ったような性格”などというような言葉が存在するほど、竹の割れ方は特徴的である。真っ直ぐパツパツと、本当に気持ちよく割れるのである。この言葉を聞いただけ、目にしただけでは本当の意味で理解することはできていなかったことに改めて気がついた。実践して初めていのちを感じ取ることができるのだと思った。これまで、楽しみながら行なってきた野外活動なども、実際に外の風に触れ、空気を感じながら行なってきた。これらの経験は気づかぬうちに生きている自然を全身で経験していたのだと思う。

竹クラフトに関して、様々な世代の人たちと昔ながらの日本の遊びを共有し、自然と共に生きる為に、一番バランスの取れた成長・発展の仕方を、人間の位置づけを考えていけたら良いと思った。教育の為

にプログラミングされた高性能なおもちゃが研究・開発されていく中で、やはりその中心的観点はここになくはならないものであるような気がする。昔の人が残してくれた遊び、その他にも我々が忘れてしまいがちなこと、昔から当たり前のように存在していた大切な自然たちを振り返り、目を向けていくこと、これらが本当に必要になってきていると思う。訪れてくれた人たちから、“楽しかった”“また作りたい”などという感想をいただき、自然と触れ合うことの暖かさを心で感じていただけたことを心から良かったと思う。竹細工の魅力をもっと多くの人に伝えていけたら良いと思った。

### 竹を通じた五感の覚醒への気づき

文学部 人間科学科 佐藤真咲

今回文化祭に参加してみても感じたことは、“物事を一から計画し、そしてそれを実現させていくということは、非常に難しい”ということである。私たちが最初に計画していたことは、クオリティーの低さや材料の問題などにより何度も方向性を変えることになり、最終的に最初の計画とは違うことを行うことになった。私は正直、最初の計画段階では、本当に自分がやりたいことを提案し、クオリティーや材料などの現実的問題をあまり考えていなかった。作業を進めていくうちに、色々な壁にぶち当たり、自分の甘さを反省した。物事を計画するときには、最初からきちんと「実際本当に実現することができるのか」「できるとすれば何を準備し、何が必要なのか」「周りは自分に何を求めているのか」ということをきちんと把握しておかなければならないと実感した。

なんとか文化祭当日までに準備が終わり、本番を迎えることができた。そんな中、私が来て下さるお客様たちと接していて嬉しかった出来事が一つあった。私がある親子連れの方たちと一緒に竹細工を行っている時、お母さんが竹の匂いを嗅ぎ、子供に「これが竹の匂いやで」と子供に教えると、子供が本当に驚いた様子で「うわぁ～、ほんとや、匂いする」と初めて体験する匂いに感動していたのである。私はその光景を見て、この文化祭をやって良かった、やる甲斐があったな、と思った。ただ単に竹細工をするだけでなく、きちんと竹の匂い、素材そのものまで子供に教えてあげるお母さんも素晴らしいと思ったし、その子供も初めて嗅いだ竹の匂い、感動を忘れることはないだろうと思う。

この文化祭を通じて、普段なかなか接する機会のない子供たちや地域の方々と一緒に過ごすことができた。人と接している中で自分も教えることの難しさや、人とフィールドワークすることの楽しさを改めて実感することができた良い機会であった。

甲南 21 クリエイティブ・ブランチイベント活動の一環として、学園祭で展示発表を行ないました。

今年度の活動を纏めたパネル展示とともに、体験学習のスペースでは、竹細工・クラフトのブースを設置し環境教育の一端を体験していただきました。

3日間を通して、のべ 135 名の方々にご来場いただきました。